

下田歌子の『源氏物語』講義

—— 塩田良平・三谷榮一先生聞き書 ——

『源氏物語』は古くから多くの読者を得てきた作品である。文学に心魅かれた者は、その名に憧れ、いつか読みたいという願いを持つのではないだろうか。筆者は十代の頃に現代の訳本なら読めるのではないかと思い、谷崎潤一郎の『新訳源氏物語』を読み始め、読了することができなかったという苦い経験がある。自分の幼さや力量不足を考慮せず、ただ憧れていたにすぎなかった。

下田歌子の『源氏物語講義』は、首巻を昭和九（一九三四）年四月、第一巻を昭和十一（一九三六）年五月に出版された。首巻は「総論及梗概」、第一巻は「桐壺 帚木 空蟬」の三巻を著した。本文は『湖月抄』を用い、口訳、解釈、評説として各巻の説明と歌子の見解を述べている。

『源氏物語講義』首巻の緒言に、歌子もまた『源氏物語』

大 井 三 代 子

の名称に憧れて早く読みたいと熱望していたと書いている。歌子の父平尾録藏は「少女には害ありて益無き書」として読むことを許さなかった。上京して和歌の師や国学の大家から『源氏物語』を読むことを勧められ、ようやく父の許しを得て『湖月抄』を与えられた。歌子は『源氏物語』の梗概を知るに及んで、自分は何故か淡い失望に似た、何となく満たされぬ様な気分があり、それをどうする事も出来なかったと書いている。武家の厳しい家風の中で育てられた歌子には、『源氏物語』が描く世界は自分の知るそれとはかけ離れていて、戸惑いもあったのではないだろうか。歌子は日本の女性を研究するようになり、平安朝当時の社会精神や女子の思想の目標がどのあたりにあったのかを探り得たように思い、著者の思いや作品の良さも理解するよ

うになった。緒言の最後に、歌子は自身を「著者紫式部の信愛者であり、源氏物語の禮賛者である。」と述べるほどになった。時代背景や当時の女性の有り様を知ること、歌子の『源氏物語』の鑑賞は深みを増していったのだろう。歴史上に知られた日本の女性たちの研究は、大正二（一九一三）年に『日本の女性』と題して実業之日本社から出版された。

歌子は明治五（一八七二）年に宮中に出仕、明治九（一八七六）年に命婦十等に昇進し、竹の命婦の名を賜った。明治十二（一八七九）年に辞するまでの宮中生活は、歌子にとって貴重な体験となった。『源氏物語講義』第一巻の「はしがき」に「自分が宮廷奉仕は、西の丸御炎上前からであった為に、京都宮中の御物をそっくり移されてあつて、なほ平安朝の匂ひの漂ひ残るほどにて、得難き幸を蒙った」と当時を追想している。西の丸御殿が焼失したのは明治六（一八七三）年のことで、青山御所が仮皇居となった。また「明治の御代の初年に奉仕した事は、孰れにもせよ有難き事で、古文取材の點にも資する所があつたには相違無い」と述べている。実際に『源氏物語講義』の解釈には、明治時代の言い方や「宮中奉仕の頃の事」として歌子自身の体験を書いている箇所を見ることができる。

歌子は首巻を出版した後に右腕に疼痛を感じて筆を持つ

ことも困難になった。第一巻は小康の時に執筆するという状況で、出版した年の十月八日に逝去した。このため歌子自身が講義録を訂正増補した『源氏物語講義』は、この二冊のみとなったのである。平成十四（二〇〇二）年三月に実践女子学園から発行された『源氏物語講義』若紫巻は、大学図書館で所蔵している歌子の自筆草稿をもとに制作されたものである。

歌子の『源氏物語』講義は、早稲田大学の坪内逍遙の講義と並ぶ名講義といわれていたという。その講義の記録は、卒業生の高嶋伊都子が速記で行っていた。大量の速記録は残されているが、それを文字化することができずに今日に至っている。かつて大学図書館では速記録を文字化し、『源氏物語講義』として世に出すことを検討したことがあった。卒業生から、速記の方式が衆議院で行われていた荒波式であるとの情報を得た。荒波式の速記をする人を探して問い合わせをしたところ、速記の文字化には時間がかかる、速記の記録者には独自の方法があり解説が難しい、概要はわかると思うが完全なものは望めないとのことで断念したという経緯がある。

本稿では、歌子の講義を実際に聞いた塩田良平先生と三谷榮一先生の話を紹介したい。塩田先生の話は、昭和四十五年、筆者が大学四年生の時の「国文学史」講義で話

されたものである。また三谷先生の話は、平成十三（二〇〇一）年の頃に先生のご自宅で録音し、テープ起こしをしたものである。

塩田良平先生聞き書

下田歌子の『源氏物語』の講義は、その当時評判がよかった。世間の評判はいいけれど、本当のところはたいしたことではないのではないか。女だてらにいい気になっているのだろう。下田の講義を聴きにいった、何かおかしなことをいったら揶揄してやろう。私は教室の廊下に立ち、腕を組んで寄りかかりながら聴き始めた。どうせたいしたことはいないだろうと思ってやってきたのだが、いつの間にか引き込まれて、廊下にじっと立って聞いていた。それはすばらしいものだった。講義が終わり、教室の中が騒がしくなっていて、いつの間にか講義に聞きはれていた自分に気がついた。やがて下田歌子が教室から出てきて、私は思わず深々とお辞儀をした。下田は、私のほうをちらっと見て何も言わずに立ち去った。

それから四、五日経って、私は餞を言い渡された。『源氏物語』の講義を聴きにいった日に、私は酒を飲んでいたのであった。学校に酒を飲んでくるとは何事か、と見とがめら

れて餞になったのだ。餞にするのなら、教室から出てきて自分の顔を見たときに、「餞だ！」といえればいいじゃないか。今になって言い渡すなんて何事だ。その時私は、もう二度と実践なんかに行くものかと思った。友人の守随憲治が文学部長になり、実践に來ないかと声をかけてきた。守随と私は軟派で、一緒に遊んだりしていた間柄だった。その守随にいわれたので、二度と行くものかと思っていたのに、こうして実践に來ることになった。

三谷榮一先生聞き書

私は明治四十四（一九一一）年七月八日に東京府荏原郡大崎町に生まれました。中学時代は、特に文学が好きということではなかったけれどよく勉強しました。絵を描くことが好きで、一時は絵描きになりたいと思ったことがあります。

國學院大学時代に、『源氏物語』に関しての思い出があります。その頃の國學院は、予科二年、本科三年でした。國學院時代に、私はすばらしい先生方に会いました。武田祐吉先生、高崎正秀先生、今泉忠義先生、折口信夫先生、山岸徳平先生に、学問研究の上で多くのご教示をいただきました。これらの先生方にお会いしなかったら、文学を研

究する私はなかったのではないかと思います。

その頃折口先生は郷土研究会を主宰し、毎週木曜日に六時頃まで会を開いていました。折口信夫先生と武田祐吉先生のお弟子が今泉忠義先生です。私は、今泉先生のお勧めにより郷土研究会に入会しました。また今泉先生のお勧めで、鈴木棠三と一緒に、柳田国男先生に師事しました。二人の民俗学の大家に教えを受けたわけです。お二人の先生は、それぞれの方法で民俗学を確立しました。

当時研究室でリーダー的存在だったのは、能登一宮の宮司のご子息だった藤井春洋さんです。藤井さんは折口信夫先生の後継者といったような存在で、折口先生と同居していました。昭和十九年に折口先生の養子となり、先生のお宅の家政全般を仕切っていました。気の毒なことに藤井さんは硫黄島で戦死しました。

私が折口先生から『源氏物語』の御講義を伺ったのは昭和七年から十二年までの間です。折口先生の『源氏物語』に関するお考えは、御講義の合間にされるのが常でした。本版本の『湖月抄』を用いて、『万葉集』の御講義のような語句に対する細かい御考証はなく、流暢な、自然と聞きはれていくような名調子でした。

新しい巻の講読に際しては、まずその巻についての先生の御説をかなり詳細に述べられる。その中には種々の新説

が述べられていました。例えていえば、折口先生は、『源氏物語』は若紫巻から始まったというお考えを古くからもっていらつしやいました。また夕顔巻は、平安時代の中期でも末期でも、およそ女流文学などには類がない市井の描写、しかもそれがなかなかの筆致で、殊に河原院における物怪などの描写は真に迫って陰惨な感じさえる。そうしたことから、作者についても、全部が紫式部の創作になるものではないといわれていました。

私が学生の頃、折口先生は、実践に下田歌子先生の『源氏物語』の講義を聴きに行かれていました。昭和三年頃から聴講していたのではないかと思います。折口先生は、その頃國學院で『源氏物語』の御講義をなさっていました。実践に行く日はいつと決まっていたわけではなく、藤井春洋さんから「今日は実践に行くよ。」と声がかかります。そうすると、その場にいた五、六人の学生が一緒にいくわけです。私もその中の一人になって、下田先生の『源氏物語』の御講義を聴きにきました。

当時下田先生は宇治十帖を御講義されていたように思いますが、大切なノート類を戦争で焼失してしまったので詳細はわかりません。下田先生の『源氏物語』の御講義は、名講義と評されていました。ご講義はとてもやさしく、わかりやすいという印象があったと記憶しています。考証と

解釈は丁寧で詳しく、特に宮中生活に関すること、宮中行事のことなどは詳細でした。板書は仮名で美しい文字でした。

教室の前のほうに速記をとっていた人がいたような気がします。教室には実践の学生だけではなく、卒業生らしい年輩の婦人の姿がありました。みな熱心に聴講していました。講義が終わると聴講していた女性たちが「下田先生！」と言って、先生を慕って取り囲みます。國學院大学が男ばかりなので、女性が「わー！」という感じで取り囲む姿は一種の異様な雰囲気があって、驚いてどぎまぎしてしまいました。

折口先生は大阪出身の民間人でしたので、宮中に関することは理解しにくいものがあつたのではないかと思います。折口先生は、ご自分が疑問に思つたことやわからないところを、下田先生がそろそろ講義をなさるのではないかという頃を見計らって聴講していたのではないのでしょうか。下田先生の解釈は、折口先生の文学理解に影響を与えたのではないかと思います。

塩田・三谷両先生の話に、歌子の『源氏物語』講義の様子を少しは実感できるのではないかと思う。『塩田良平教授略年譜』（『実践国文学』第一号 昭和四十七年三月）に

よれば、歌子の没年の昭和十一年、塩田先生は三十七歳であつた。若き日の塩田先生の御様子を知る一つの出来事である。塩田先生は美しい情感のある朗読をされる方だった。近代文学だけでなく、『万葉集』などを通して、文学の鑑賞、文学性を問うご講義をされた。三谷先生は、長い間大学図書館長に就任されて貴重書の収集に尽力された。筆者は、三谷先生から収集なさつた本のことなど貴重なお話をうかがわせていただいたことがある。また機会があれば、お二人の先生の御講義のことや収集された資料などについて書きたいと思う。

（おおい みよこ・実践女子大学文芸資料研究所客員研究員）